

酒蔵の地下に眠る古代の遺跡

大石東遺跡と西郷古酒蔵群

重なり合う二つの遺跡

江戸時代から続く酒蔵の町として有名な西郷地区ですが、今回の発掘調査では酒蔵が誕生するはるか昔、奈良時代（約 1300 年前）の遺跡も発見されています。

遺跡は、酒蔵の地下にひっそりと眠っていました。調査区の地層を観察すると、何層も重なり合うように堆積した酒蔵の地層のずっと下に、奈良時代の遺跡の層があるのがわかります。

酒蔵の地下に古代の遺跡があることは意外と知られていませんが、実はこれまでも3回、この酒蔵の地下の遺跡は発掘が試みられてきました。西郷小学校の敷地の中も、発掘調査されています。しかしこれまで遺跡の実態がわかるような発見に恵まれず、なぞの多い遺跡でした。

まだ酒蔵もないはるか 1300 年前の西郷の町は、一体どんな様子だったのか？今回の調査ではじめてその実態に迫ることができました。



たてあな建物とほったて柱建物

酒蔵の地下、地表から約 80～100cm ほどの深さでその地層は発見されました。最初に見つかったのはたくさん土器が混じった濃い茶色の地層です。この層から出土した土器は、古いものでは古墳時代（約 1600 年前）から、新しいもので平安時代（約 1000 年前）くらいという時期差のあるものでした。そしてこの茶色の地層をさらに下に掘り進むと、たくさんの建物の跡が残された地層が現れたのです。

建物は「ほったてばしら建物」と呼ばれるタイプのもものが 5 棟、「たてあな建物」と呼ばれるタイプのもものが 1 棟、それぞれが隣り合うように、または重なり合うようにして発見されま

した。これら 6 棟の家は、全部同時に存在していたのではないと考えられます。出土した土器や、それぞれの位置関係から奈良時代（西暦 700 年代）のある時期に 4 棟の家があり、それ以前のある時期に 2 棟の家があったのではないかと考えられます。

なかでも特に注目されるのは、床の大きさが約 4 m 四方くらいの小さなたてあな建物とその北側を囲むようにたてられた、3 棟の長方形のほったてばしら建物の配置です。この建物の配置が計画的なものかはわかりませんが、出土遺物などからこれらは奈良時代の建物と考えられます。

火事？ それとも？

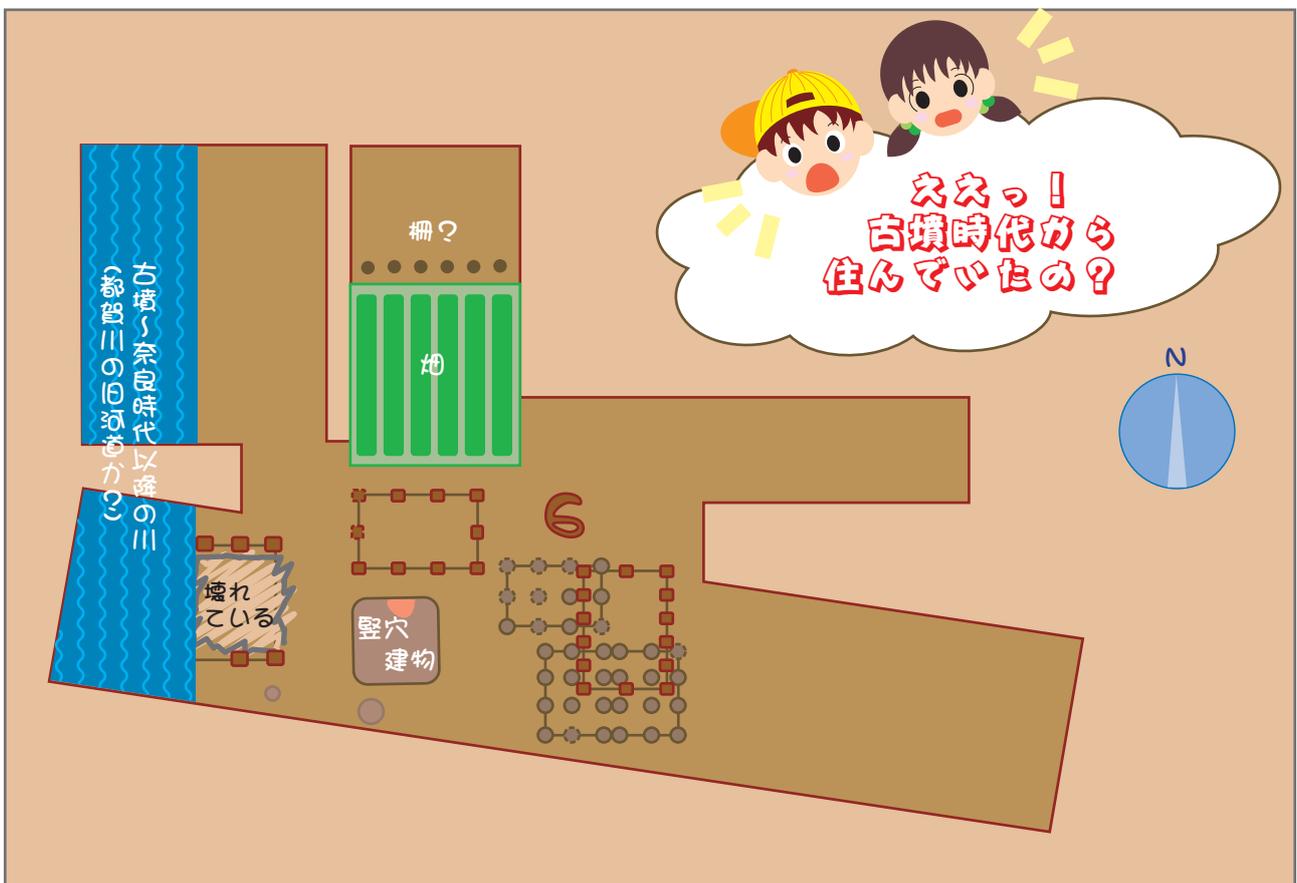
神戸市内で奈良時代のたてあな建物が発見されるのは珍しく、これまでたてあな建物とはもっと古い時代（古墳時代や弥生時代）に使われた家のタイプだと考えられてきました。しかし今回の発見で、奈良時代にここに住んでいた人たちは、わざとたてあな建物という建て方を選んだ可能性が高まってきました。家の内部は焼け焦げた跡がありました。家は火災にあったのでしょうか？いまのところ焼け焦げ方から、火事があったというよりは、なにか強い火を使うような仕事を、このたてあな建物の中で行っていたのではないかと考えられています。普段生活する家とはちがう役割が、この小さなたてあな建物にはあったのかもしれませんが。

奈良時代ごろ西郷の近くの海には「みぬめの浦」と呼ばれる港があったと万葉集にうたわれてっていますが、今回発見されたこの建物は、なにかそういった浦を管理する人たちとかかわりがあったのでしょうか？残念ながら今回はそ



たてあな建物の床面が焼けこげている様子

ういった、遺跡の性質を明らかにする決定的な証拠になるものは見つかりませんでした。しかしたくさんのおもりが出土しています。場所からいっても、どうやら海に関する生活をしながら、家の裏に小さな畑も作っていた、という人たちが住んでいたのではないのでしょうか・・・。



西郷古酒蔵群発掘現場マップ(見取り図)